

満洲の歴史記憶に関する日中比較研究の一試み —中国残留日本人を手がかりとして—

南 誠 (Minami Makoto)
長崎大学 (Nagasaki University)

1 はじめに

1997年のアジア金融危機を契機に東アジア地域内協力の必要性が認識されはじめ、そして「東アジア共同体」の構築が主張されるようになった。しかしその構築を阻む要因として、歴史認識をめぐる対立の問題も浮上した。歴史認識の問題が国家間の印象を悪くしていることは、特別非営利法人「言論 NPO」が行った「日中共同世論調査」を手がかりに見れば、明らかである。相手国に対して「良くない印象を持っている」理由として、「歴史問題などで日本を批判するから」(日本側)、「過去に日本と戦争をしたことがあるから」、「中国を侵略した歴史についてドイツのように正しく認識していないから」と「歴史問題などで不適切な発言をする政治家が相次ぐから」(中国側)といった歴史認識にかかわる理由が常に上位を占めている¹。

こうした歴史認識の対立を解決するために、これまで東アジア諸国の研究者は実証的研究を積み重ね、さまざまな対話を試みてきた。しかしこれらの試みは歴史事件の解明と死亡者数の検証に集中し、歴史認識という課題を根本から検証したとは言いがたい。このような事態を招いたのは端的に言えば、従来の試みが、固定化したナショナリズムの対立を超克する理論的枠組みも分析方法も持ち合わせていないからであろう。今日の歴史記述はそもそも、戦後の国民国家体制の再建とともに書かれたものであり、その創造過程の解明を抜きにして、歴史認識の問題を本質的に考えたことにはならない。この課題を考えるにあたり、東アジアの国々と地域がすべて関係していた「満洲国」が恰好の題材である。

「満洲国」とはかつて中国東北地域に存在した14年足らずの「国家」である。その特殊な歴史性がゆえに、1945年、日本の敗戦と共に崩壊した。当時満洲に居住していた諸民族の人びとは、「満洲国」が崩壊してから、中国の東北地域から自国あるいは元の居住地へ帰還したか、他の国家と地域へと移住していった。これらの人びとの戦後移住と彼らをめぐる関係諸国の政策変遷、そして居住国(地域)における彼らの「満洲」記憶の表出と意味に関する研究は、歴史認識の問題を考えるのにきわめて示唆に富んでいる。また当時の満洲に日本人のほか、漢人、朝鮮人、モンゴル人、満洲人、ロシア人、ユダヤ人とポーランド人などが居住していたことを考えると、本研究課題は東アジアに限らず、より国際的に取り組むべき課題でもある。筆者はそうした国際的な研究をめざし、その第一歩として、とりわけ東アジアのなかでも重要な位置を占めている日本と中国に焦点を定めて、満洲の歴史と記憶の比較分析をとおして、歴史認識の対立を惹起した記憶のされ方や、その対立を越えて構築される人々のつながり(その可能性を含めて)を明らかにする研究に取り組むようになった²。本論文はその研究成果の一部であり、日本とくに長野県に建立された満洲

¹ 特別非営利法人「言論 NPO」の HP (<http://www.genron-npo.net/>) を参照。

² 満洲の歴史と記憶に関する研究調査は、2003年頃より行ってきたが、その研究プロジェクト

関連の石碑を中心に構築された「記憶の場」(ノラ 2002)を手がかりとして、そこに表出されている満洲記憶について計量的分析を試みる一方、地域社会における満洲記憶の意義について検討する。

2 研究視角と研究方法

2.1 研究視角

1945年日本が敗戦してから、海外居留日本人660万人のほとんどが集団引揚によって、日本に引き揚げた。満洲にいた155万人の日本人もしかりである。日本に引き揚げたこれらの人びとは引揚者と位置づけられ、政策的にも社会的にも差異化されてきた。これに加え、戦前の国策のもとで、「国のために」と思って満洲へ移住したことは、戦後、「侵略者の手先」と評されるようになった。こうした社会環境のなかで、彼(女)らが持つ満洲の記憶はこれまで、公共空間では語られないものと認識されがちである。

確かに戦後の日本社会において、満洲の記憶が語りにくいものであったことは紛れもない事実である。しかし敗戦直後の1946年より引揚者関係の団体が組織されてきたことや、満洲に関する開拓史の編纂、書籍の出版、石碑の建立、祭祀行事の開催なども継続的に行われてきたことを考えると、満洲記憶の表出はけっして途絶えることがなかった。これに鑑み、本来ならば、戦後の日本社会において満洲の記憶され方、表出された方が検討すべき課題であるが、それが必ずしも充分研究されてこなかった。管見の限り、こうした研究課題に真正面から取り組んだのは、山本有造編『満洲 歴史と記憶』(2007年)と坂部晶子の『「満洲」経験の社会学—植民地の記憶のかたち』(2008年)にほかない。本研究はこれらの研究を参考して構想したものである。ただしこれらの研究が質的研究を採用しているのに対して、本研究はテキストの計量的分析方法を用いる。計量的分析方法を採用する理由は後述するが、ここで本稿が「記憶」を用いることの意味について、簡単に触れておきたい。

記憶という術語が「過去を認識しようとするあらゆる営み、そしてその結果得られた過去の認識のあり方」(小関 1998: 7)と定義されているように、本研究で満洲記憶という言葉を用いて捉えようとするのは、「過去の出来事そのもの」ではなく、「過去をめぐる社会的営み」である。これを検討するにあたり、満洲関連のモニュメントの建立を中心に構築された「記憶の場」(ノラ 2002)が重要な手がかりとなる。またここでいうモニュメント(記念碑、慰霊碑など)は「出来事を、証拠品としてのモノによってではなく、より直接に保存するために意図的に構築された記号」(小川 2002: 54)として捉える。

クトを本格的にスタートさせたのは、2011年より公益財団法人トヨタ財団の研究助成金(研究番号D11-R-0175(2011年より2年間)、研究テーマ:歴史認識の対立を越える人びとのつながりの発見と構築—満洲の歴史と記憶の日中比較研究をとおして)の助成を受けてからである。また2012年からは、文部科学省の科学技術人材育成費(テニユアトラック普及・定着事業、2012年度より2年間)の助成をも受けて、本研究プロジェクトを「近代東アジアにおける境界文化の生成と溶解」の一環として遂行するようになった。

2.2 問題設定

満洲モニュメントに関する先行研究として、坂部晶子の『「満洲」経験の社会学』がとりわけ挙げられる。そこでは、満洲モニュメントに書かれた文章（碑文）のパターンをコンパクトにまとめた事例として「満洲大八浪開拓団慰霊碑」の碑文が引用され、碑文のパターン化が論じられた。以下は長くなるが、それを引用しておこう。

（「満洲大八浪開拓団慰霊碑」の碑文）今を去る二十有余年前、国策に従い、数多くの人々勇躍満洲に渡り、三江省大八浪に泰阜分村を建設したり、しかるに、第二次大戦は日本の無条件降伏といふ悲運に終結し、理想郷建設も中道にして挫折し、開拓民は異郷の曠野をさすらひ、内地帰還の望みも空しく、大陸に恨みをのんで不帰の客となる。誠に痛恨の極みなる。されど諸氏の雄魂は燦として青史に消ゆるなし、今ここに碑を建て、永き世の平和を祈り、誅詞を勒して拓魂を万世に伝ふ。

（坂部の解釈）これらの記念モニュメントの碑文は、主に、三つのパートからなっていると考えられる。第一のパートは、「満洲」への入植の経緯を説明する部分であり、右(上)の例では、第一のセンテンスがそれにあたる。第二のパートは、それぞれの開拓団が経験した逃避行の惨劇についての記述であり、「しかるに」以下から「青史に消ゆるなし」の三つのセンテンスがそれにあたる。第三のパートは、開拓の記念・犠牲者への追悼・平和の祈念を述べる部分で、最終センテンスがそれに相当する（坂部 2008:107-108）。

満洲移民が辿ってきた歴史的経緯を考えれば、この解釈は①1945年までの満洲移住（満洲移民送出）、②1945年8月敗戦直後の逃避行、③現在（碑の建立時）の思いという時間軸に沿っており、碑文を検討するのに一定の有効性を持っている。こうした碑文パターンの起源は、全国拓友協会が1953年に、東京都多摩市拓魂公苑で建立した「満洲開拓殉難者之碑 拓魂」にあると考えられる³。

この碑は、満蒙の荒野に無残に散った八万の開拓者とその人々を守りつつ自らも逝った関係者多数の御霊が合祀してあります。昭和七年はじめられた満洲の開拓事業は、満蒙の天地に世界に比類なき民族協和の平和村建設と祖国の防衛という高い日本民族の理想を実現するために、重大国策として時の政府により行われたものがあります。凍土をおこし黒土を耕し、三十万の開拓農民は日夜祖国の運命を思いながら、黙々と開拓の鋤を振るいました。然し、その理想の達せられんした昭和二十年の夏、思わざる祖国の敗戦により地と汗の建設は一瞬にして崩れ去り、八万余の拓士と関係者は、満蒙の夏草の中に露と消えていきました。そして、そこには未だ一輪の花も供えられたことはないのです。ここに同志相図り、水清きこの多摩川の丘に一碑を建てて、祖国と民族のために雄々しく不の開拓を戦い抜き、そして散って

³ これについてはまだ検討の余地がある。

いった亡きこれらの人々の御霊をお祀りするとともに、再びかかる悲しみのおこることなき世界の平和の実現を心からお祈りせんとするものです。

昭和三十八年八月 建設委員長 安井 謙

こうした碑文パターンの起源については、また別の機会で検討したいが、ここで指摘しておきたいのは、このように予め設定したパターンで碑文を読み解くのが、碑文に込められた多くの意味を見落としてしまう危険性を孕んでいることである。また坂部の研究は、碑文を一つの手がかりとして、満洲へ移住した都市住民と農村住民との満洲体験の語られ方を比較検討したに過ぎず、石碑についての分析は必ずしも充分ではなかった。これに鑑み、本論文は坂部の議論を踏まえつつ、計量的分析方法を用いることで、満洲関連のモニュメントとしての石碑についての分析を深めていく。

2.3 計量的分析の試み

テキストの計量的分析を行うにあたって、樋口耕一が提唱した分析アプローチを採用する(樋口 2004)。樋口のまとめによれば、コンピュータを利用したテキストの計量的分析は1960年代の後半から盛んになり、それには「分析者が作成した基準にしたがって言葉や文章を分類するためにコンピュータを用いる」**Dictionary-based** アプローチと、「頻繁に同じ文書の中にあられる言葉のグループや、あるいは、共通する言葉を多く含む文書のグループを、多変量解析によって自動的に発見・分類するためにコンピュータを用いる」**Correlational** アプローチがある。前者は分析者が分類基準を作成することで分析者の持つ理論や問題意識の操作化が目指されたに対して、後者は分類をコンピュータに任せることで、分析者の理論仮説や問題意識によって「汚染 (contaminate)」されていない状態で、データの分析が目指された。

テキストの計量的分析の二つのアプローチは長い間、それぞれの発展を遂げてきたが、それぞれに利点と欠点が存在する。例えば、**Dictionary-based** アプローチはコーディング規則を作成することで、分析者の理論や問題意識を自由に操作化し、テキスト型データのさまざまな側面に自由に焦点を絞れる反面、意図のないしは無意識のうちに、理論や仮説に都合の良いコーディング規則ばかりを作成してしまう危険性を持つ(前掲 103-104)。こうした欠点に鑑み、樋口は二つのアプローチを併用させることで、欠点を克服し、「客観性」を維持させるために、以下の2段階からなる統合的アプローチを提案した。

段階 1 : **Correlational** アプローチに倣い、多変量解析を用いることで、分析者の持つ理論や問題意識の影響を極力受けない形で、データを要約・提示する。

段階 2 : **Dictionary-based** アプローチに倣い、コーディング規則を作成することで、理論仮説の検証や問題意識の追究を行う。

本研究におけるテキストの計量的分析は基本的には、こうした統合的アプローチに沿って分析作業を行う。また実際の分析作業には、樋口が統合的アプローチに適した分析シス

テムとして作成した KH Coder⁴を使用する。

分析に用いる碑のデータは、現地調査のほか、開拓史と出版物、および、ネット検索で集めたものである。このほか、筆者は 2001 年より、長野県とくに下伊那郡地域で実地調査を行ってきている。その際に得た満洲移民関係者の聞き取り調査データと、泰阜村慰霊祭への参与観察で得たデータも本稿の考察に用いる。

3 碑文の量的分析の試み

3.1 満洲モニュメント(石碑)の概要把握

表 1 日本全国満洲関連石碑

地域ブロック別	碑の数
北海道地方	0
東北地方	10
関東地方	29
中部地方	81
近畿地方	14
中国地方	9
四国地方	6
九州地方	6
合計	155

表 2 中部地方の満洲関連石碑

地域別	碑の数
甲信越(長野県)	62
東海	13
北陸	6
合計	81

甲信越は、新潟と山梨を含まない

筆者のこれまでの調査において、日本全国の満洲関連の石碑を表 1 のように、合計 155 基を確認することができた。最も多い中部地方の 81 基に続き、関東地方 29 基、近畿地方 14 基、東北地方 10 基、中国地方 9 基、四国地方と九州地方 6 基という順位になっている。中部地方の内訳(表 2)をさらに見ていくと、甲信越の長野県が 62 基と最も多く、中部地方の 77%、全国の 40%を占めている。

長野県に満洲関連石碑が最も多く建立されたのは、長野県からの満洲移民が日本全国の中でも最も多く、人数が 3 万人以上を越え、全国の開拓移民総数の 12%以上を占めているからである。

以上のような満洲関連石碑の全国的分布状況を踏まえて、本稿ではとりわけ、坂部も用いた長野県の石碑に焦点を定めて、計量的分析を行うこととする。付表 1 は長野県の満洲石碑をリストにしたもので、石碑の所在地方、石碑の名、建立地、建立年月日、碑文の有無をまとめている。

計量的分析に入る前には、長野県内の満洲石碑の分布状況(表 3)、建立年代(表 4)、建立場所(表 5)を見ておきたい。

⁴ KH Coder はフリー・ソフトウェアとして公開されている (<http://khc.sourceforge.net>)。

表 3 満洲石碑の分布

地方別	碑の数
北 信	9
東 信	7
中 信	7
南 信	39
合 計	62

表 4 建立年代一覧

年代別	碑の数
1940 年代	1
1950 年代	12
1960 年代	11
1970 年代	31
1980 年代	3
1990 年代	3
不 明	1
合 計	62

表 5 建立場所

	碑の数
公共空間	23
神社	19
寺院	15
霊園	3
不明	2
合 計	62

表 3 によれば、南信地方の満洲関連石碑が長野県内で最も多く、39 基で、全体の 63% を占めている。これは南信地方の満洲移民が多かったことと関係してであろう。そして表 4 の建立年代によれば、1970 年代に 31 基（50%）、1950 年代 12 基（19%）、1960 年代 11 基（18%）が建立されている。1970 年代に最も多く建立されたのは、坂部が指摘するように、この時期が戦友会や「満洲」関連同窓会の設立時のピークとも重なっており、この年代になると、引揚者たちの生活が安定し、また日中国交が締結された変化を受けて、満洲への回想、そして過去と向き合う姿勢が現れてきたと言えよう（坂部 2008: 112）。一方、1950 年代と 1960 年代に満洲石碑が多く建立されたのは、引揚者の社会運動、戦後との決着、「弔い」共同体の形成などが要因であった。

満洲石碑が建立された場所に関しては表 5 が示す通り、公共空間（公園、公民館、役場と小学校）23 基（37%）、神社 19 基（31%）、寺院 15 基（24%）、霊園 3 基（5%）となっている⁵。公共空間に建立された満洲関連石碑が最も多いことから、満洲をめぐる記憶の場多くは人びとに対して開かれる存在であることが分かった。

本節の最後に、満洲関連石碑の名を手がかりに、その特徴について考えてみたい。坂部の分析によれば、これらの石碑は大きく「慰霊碑」と「拓魂（拓友）碑」に分けられ、前者は開拓団、後者は義勇隊関係に多いという（坂部 2008:105-106）。しかしこれらの石碑名をリスト化し、KH Coder を用いて分析し、細分化したところ、表 6 の通り、7 つのカテゴリーに分けられることが判明した。

表 6 石碑名による分類

	分 類	主な使用語	特 徴
1	慰霊碑	慰霊、地藏、供養塔、位牌	・死者の弔い ・開拓団関係に多い

⁵ なお個人によって建立された満洲関連の石碑も 4 基（拓魂、満洲勤労奉仕隊の碑、満蒙開拓青少年義勇軍殉難之霊と島岡家慰霊之碑）確認できた。これらの石碑は宅地内か、墓地に建立されている。その私的な性格に鑑みて、今回は分析対象から除外することにした。

2	拓魂碑	拓魂、拓友	<ul style="list-style-type: none"> ・「満洲開拓」の記念(顕彰) ・つながり・共同体意識の強調 ・開拓団関係に多い、義勇隊関係も少し
3	少年義勇隊碑	少年義勇隊	<ul style="list-style-type: none"> ・少年義勇隊事績の記念(顕彰) ・義勇隊関係のモニュメント
4	殉国碑	殉国、殉難	<ul style="list-style-type: none"> ・死への意味づけ(国のため) ・開拓団関係に多い ・殉国碑が1基のみ、分類1と2との併記が多い
5	引揚碑	引揚	<ul style="list-style-type: none"> ・引揚の記念 ・1基のみ
6	日中友好碑	日中友好、日中不再戦	<ul style="list-style-type: none"> ・平和志向、日中不再戦 ・1基のみ
7	その他	山本慈照	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な人物の功績の顕彰

表 6 の分類をもとに検討すると、満洲関連石碑の多くは「慰霊」「死への意味づけ」が目されていることが分かる。こうした傾向はけっして特殊なものではなく、国家の統一的な枠組みのもとで「戦意高揚」を目的に建立された忠魂碑が圧倒的に多かった戦前期に対して、慰霊碑が増加するようになった戦後(孝本 2009: 88)に一般的にみられるものである。これは靖国神社で集合的に、無個人的に「英霊」として祀り上げられているのではなく、個人としての出身家族での地位、家族の状況、同期の仲間での位置など本人の具体像の記憶が慰霊碑に刻まれ、そして地域社会で共有化されていく(孝本 2009: 93)。言い換えれば、これらの石碑には、遺族、地域住民自らの世界観が投影されているのである。

ノラの言う「記憶の場」が成立するには、「記憶意志の存在」と「時間的変化」という2つの要因が必要である。満洲関連石碑の建立から、先ず1つ目の要因「記憶意志の存在」を確認することができる。そしていったん建立された石碑は時間の経過に耐える一方、人びとに開かれた存在へと変化するのである。建立者の意図とは別に、人びとがその記憶を自由に解釈することが可能である。

3.2 碑文の概要把握とコーディング・コードによる分析

本稿の目的に沿って、ここではまず KH Coder を用いて、碑文に使われた単語の概要を把握しておく。

表 7 碑文の単語集計

異なり語数(n)	2023
出現回数の平均	2.54
出現回数の標準偏差	4.47

これらの碑文に使われた総単語数は 11,536 になるが、表 7 が抽出したように、異なり単語数は 2,023 個(全体の 17.5%)、出現回数の平均は 2.54 回である。なおこれを抽出する

にあたり、碑文の解釈に意味の無い単語として「ん、木、道、柳、下・・・」を「使用しない語」に指定する一方、解釈に必要と思われる復語として「開拓団、満州開拓、南信、殉難者、ソ連軍、拓友、開拓者、北満・・・」を「強制抽出する語」に指定した。これを基準に、碑文に頻出した単語 140 語（表 8）、碑毎の頻出語(表 9)をさらに抽出した。

表 8 碑文に頻出した 140 語

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
昭和	83	大陸	14	太平洋戦争	9	残す	7
開拓団	61	当時	14	中国	9	自決	7
開拓	39	ソ連軍	13	年	9	戦後	7
慰霊	38	及ぶ	13	発展	9	漸く	7
満州開拓	38	団長	13	北満	9	然るに	7
建立	37	中隊	13	移民	8	多数	7
入植	35	我	12	化す	8	大戦	7
建設	34	楽土	12	供養	8	男子	7
国策	33	少年	12	協和	8	地藏	7
霊	32	長野	12	空しい	8	伝える	7
八月	31	得る	12	鍬	8	同年	7
碑	30	冥福	12	思う	8	日中	7
平和	30	以来	11	十月	8	避難	7
同志	28	異郷	11	成果	8	病	7
祖国	24	義勇	11	尊	8	分郷	7
満州	24	協力	11	達す	8	奉仕	7
満州国	24	御霊	11	努力	8	勇躍	7
満蒙開拓	23	民族	11	倒れる	8	一同	6
団員	21	夢	11	突如	8	家族	6
日本	21	吾	10	病魔	8	海外	6
訓練	20	散る	10	望郷	8	飢え	6
終戦	20	信濃	10	命	8	勤労	6
青少年	19	隊員	10	理想	8	建つ	6
悲惨	17	土	10	安らか	7	故郷	6
永遠	16	東亜	10	異国	7	後世	6
犠牲者	16	眠る	10	於く	7	此処	6
義勇軍	16	友好	10	関係	7	散華	6
分村	16	有余	10	帰国	7	実に	6
殉難者	15	ソ連	9	祈念	7	出す	6
拓友	15	帰還	9	現地	7	出身	6
敗戦	15	苦難	9	今	7	身	6
慰める	14	計画	9	三月	7	人々	6
祈る	14	世界	9	三江	7	人類	6

殉難	14	先遣隊	9	参加	7	生還	6
戦争	14	送出	9	参戦	7	生存	6

表9 碑毎の頻出語

順位	抽出語	出現 碑数	順位	抽出語	出現 碑数
1	昭和	49	11	同志	19
2	建立、国策	33	12	祖国、満州	17
3	開拓団	32	13	終戦、満蒙開拓	16
4	慰霊、満州開拓	29	14	永遠、団員	15
5	八月	27	15	慰める、祈る	14
6	霊	26	16	青少年、日本、悲惨	13
7	入植	24	17	ソ連軍、義勇軍、及ぶ、敗戦、 分村、冥福	12
8	開拓、建設、平和	23	18	協力、殉難、戦争、大陸、団 長、当時、夢	11
9	碑	22	19	以来、楽土、御霊、拓友、東 亜、得る	10
10	満州国	20	20	ソ連、異郷、訓練、中隊、土、 有余	9

以上の表から分かるように、碑文に最も頻出した単語として「昭和」が石碑 49 基(全体の 79%)に現れ、83 回も使われてきた。「満洲」にまつわる史実が「昭和」時代であったことが、一目瞭然である。さらに細かく見ていくと、「昭和二十年」は「日本の敗戦」、「ソ連の急襲」といった事柄を記述しており、「昭和二十年」より前は満洲移住の年月日、「昭和二十年」より後は碑の建立日を示している。

頻出語をさらに見ていくと、「開拓団」・「開拓」・「満州開拓」・「満蒙開拓」、「慰霊」・「霊」・「慰める」・「冥福」、「満州」・「満洲国」というように、同一事柄を指す語が多く使われている。これらをまとめて分析するのに、KH Coder 用のコーディング・ルールにしたがって、次のようなコーディング・コードを作成した⁶。

*碑

記念碑 or 建立 or 碑 or 塔

こうしたコーディング・ルールに従って、合計 25 のコーディング・コード「満洲、国策、理想郷、建設・開拓、開拓団、青少年義勇隊、戦争、ソ連侵攻、悲劇、戦乱死、戦死、戦後、引揚、異郷、無策、ナショナル意識、故郷、家族、同志意識、トランスナショナル、慰霊、碑、平和、記憶、回想」を作成した。コーディング・コードによる分析の結果（単

⁶ コーディング・ルールを作成するにあたり、それぞれの単語がどのように使われていたのかを常に、「抽出語検索」で確認している。

純集計) は表 10 の通りである。

表 10 コーディング・コードによる分析結果

コード名	コード化に用いられた語	頻度	パーセント
慰霊	慰霊、霊を慰、聖霊、英霊、御霊、冥福・・・・・・・・	50	80.65%
建設・開拓	開拓、拓く、建設、入植、鋤・・・・・・・・	41	66.13%
碑	記念碑、建立、碑、塔	40	64.52%
満洲	満蒙、満洲、満州、元満州・・・・・・・・	39	62.90%
開拓団	開拓団、開拓民、開拓者、開拓村・・・・・・・・	38	61.29%
ナショナル意識	祖国、同胞、故国、日本、殉難、殉国・・・・・・・・	38	61.29%
悲劇	悲劇、婦女子、飢餓、悲惨、避難、空しい・・・・・・・・	37	59.68%
国策	国策、楽土、王道、協和	34	54.84%
同志意識	同志、拓友、我ら、我等・・・・・・・・	32	51.61%
ソ連侵攻	昭和二十年、昭和二〇年、ソ連、八月・・・・・・・・	30	48.39%
戦後	終戦、敗戦、戦後	27	43.55%
平和	平和、永遠、祈念	26	41.94%
戦争	大東亜戦、東亜戦、太平洋戦争、大戦、戦争	25	40.32%
青少年義勇隊	青少年、義勇軍、中隊、義勇、少年、隊員	23	37.10%
異郷	異郷、異国、現地	20	32.26%
トランスナショナル	日中、理想、友好、中国	15	24.19%
故郷	郷土、望郷、故郷、母	14	22.58%
戦乱死	死、病死、死す死亡、徒死・・・・・・・・	13	20.97%
理想郷	理想、理想郷	11	17.74%
戦死	戦死、散華	9	14.52%
無策	関東軍、孤児、肉親	9	14.52%
記憶	後世、記録、録、集録	9	14.52%
引揚	引揚、帰還	7	11.29%
回想	思う	7	11.29%
家族	家族	5	8.06%

3.3 碑文にみる満洲記憶のかたち

次に、碑文に現れた満洲記憶のかたちを定量的に把握するために、クラスター分析と対応分析を行った。クラスター分析は、語の最小出現数が 8 回、最小文書数が 1 回、合計 96 語でクラスター数 5 を析出することにした。そして対応分析でクラスターの位置を確認し、それぞれ①満蒙開拓志向、②ナショナル志向、③殉国顕彰志向、④トランスナショナル志

向、⑤その他、と名付けた(図1)。その内訳は表11の通りである⁷。

図1 コーディング・対応分析による分類

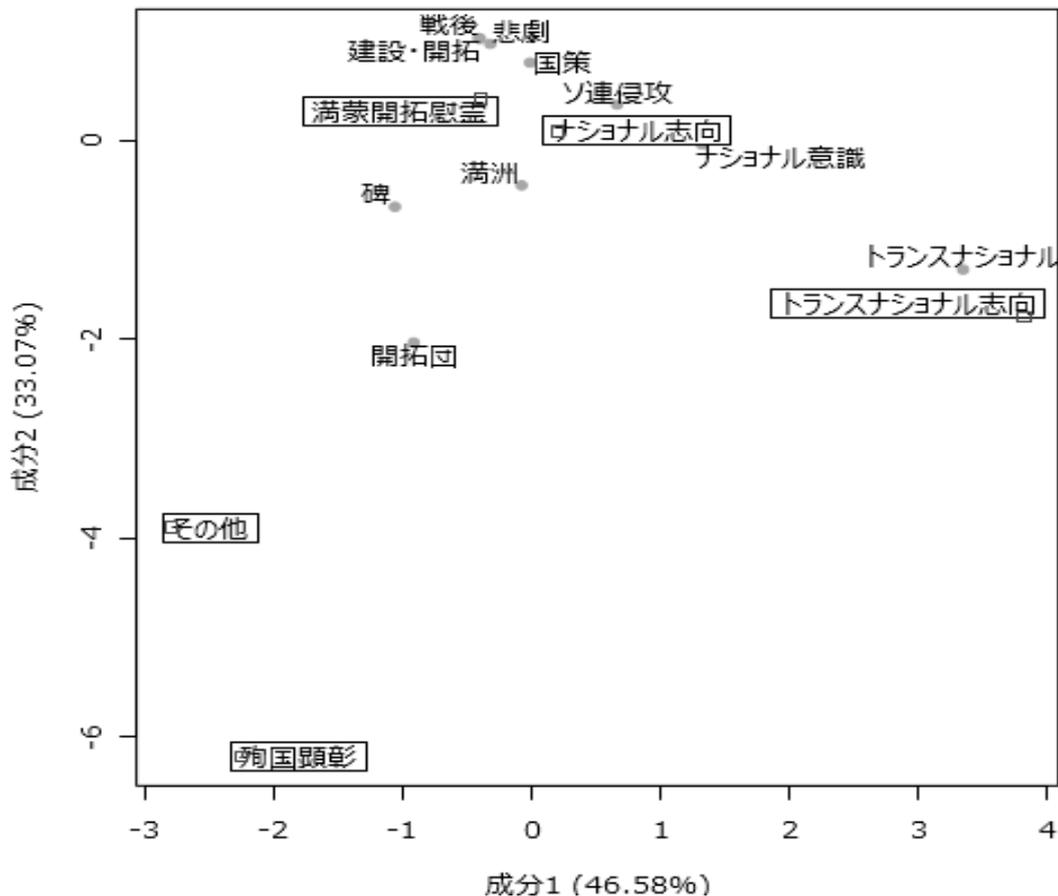


表11 分類の内訳一覧

分類	該当する碑の番号(付表1)
1 満蒙開拓慰霊志向	1、4、5、8、14、17、19、22、23、27、28、31、32、33、36、37、40、44、47、49、50、52、53、55、59、60、61
2 ナショナル志向	2、3、6、7、9、13、15、16、20、21、25、34、35、51、54、56、57、58
3 殉国顕彰志向	11、12、18、24、29、26、38、39、41
4 トランスナショナル志向	43、45、46、62
5 その他	10、30、42、48

それぞれの分類について、以下の碑文を例としてあげておく。

①満蒙開拓慰霊志向

⁷ なお内訳を確認する際、手動で部分的な修正を行っている。こうした手作業はさらに必要であると認識している。

(No.1 第九次索倫河下水内郷開拓団 慰霊之碑) 満州国独立を期に国として満州開拓移民を結成、我が第九次下水内郷開拓団は昭和十五年二月二十一日勇躍索倫河に入植し労苦を惜しまぬ努力の甲斐あり、十九年十月盛大に秋祭りを行う。しかし二十年八月九日突如ソ連軍の侵攻に依って女子子供山中に逃れ、数日山野を彷徨し、疲労に加えてソ連軍の暴力銃丸に仆れる者、自ら命を絶つ者多く、田中勇治団長は止むなく解散を決意し、自らも銃丸に仆れ死亡された、犠牲となった四五〇余名の霊を慰め、永遠の平和を祈願して慰霊之碑並びに開拓親子地蔵尊を建立する。

②ナショナル志向

(No.9 第七次中和鎮信濃村開拓団慰霊碑) 第七次中和鎮信濃村開拓団は当時の国策の線により長野県が送出母体となり全県より選出され、昭和十三年元満州国滨江省延寿県中和鎮に三百戸集団として入植し、以来八年楽土建設と民族協和に精魂をかたむけ、ようやく其の基盤を確立した。然し昭和二十年八月突如としてソ連軍の参戦により死の逃避行となり、死者六百余名を数ふ。吾れらこれを深く悲しみ以来数度にわたり、法要を営んで来ましたが、昨年吾れら同志相集り慰霊碑の建設と文集の発行を計画し 今回花岡平霊園に同志の協力により慰霊碑を建立す。吾れら深く非業に逝きし諸霊の冥福を祈ると共に、人類永遠の平和を祈念する事を祈願致します。

③殉国顕彰志向

(No.18 満州開拓第一次弥栄村長野県出身者 殉國(碑))殉國

(No.29 戦没者、満蒙開拓殉難者 位牌堂)この位牌堂には満州事変以来大東亜戦争にいたる、かの大戦において祖国日本の繁栄を信じつつ尊い命を国に捧げた一一九柱戦没者英霊と、国策の満蒙開拓に命を捧げ国に殉じた五〇柱殉難の霊が奉祀されています。春の彼岸、八月のお盆、秋の彼岸中は、この位牌堂は開扉されますのでご自由に御焼香 御礼拝ください。

④トランスナショナル志向

(No.45 日本と中国の友好の碑)昭和三十九年、当山慈照法印と中国周恩来総理と約束して、日本最初の友好の碑である。

⑤その他

(No.10 満州佐久郷開拓団物故者慰霊碑)昭和二十六年十月五日建立 選出関係町村 堅沢郷 田口村 切原村、中込郷 大沢村 前山村、臼田郷 岸野村 櫻井村 平賀村 大山村 貴沼村 団員遺族一同

4 結びにかえて

以上のように、本論は長野県の石碑を手がかりとして、満洲記憶の計量的分析を行い、満洲記憶のかたちの定量的把握を試みてきた。計量的分析を用いることで、従来の質的研究で把握できなかった碑文の細部を捉えることができた。それが分類の細分化というかたちで現れたが、その有効性はまだ検証する必要がある。コーディング作業の精緻化を含めて、今後の課題にしたい。

なお筆者は 2003 年より 3 年間連続して、長野県泰阜村の大八浪開拓団慰霊祭を参与観

察してきている。関係者への聞き取り調査も行った。これらの調査を通じて感じ取ったのは、満洲記憶をめぐる一連の行事がけっして記憶の継承に止まる問題ではなく、むしろその記憶が地域社会の資源になっていることである。満洲記憶の継承を通じて、地域社会の結束力が強化され、そしてそれが地域の発展につながっている。

慰霊祭の所要時間は 50 分ほどだったが、象徴的な儀式に終始する。慰霊祭の詳述は別の機会に譲るが、本論の最後に触れておきたいのは、慰霊祭終了後の懇談会と大八浪会で目の当たりにした記憶の多元性と越境の可能性である。

慰霊祭は象徴的な儀式に終始することで、集団的記憶を表象し、人びとの結束を強化していく。そこには個人としての発言がほとんど許されない。しかし会場が大八浪会の総会に転じたとき、個人の意見を語る機会が与えられる。

2004 年、大八浪会の総会に参加したとき、閉会の間に、ある老人の方が発言の機会を求め、許された。その発言の要旨を簡単にまとめると、「こういうふう集まって懇談するのは良いですが、いささか抵抗感がある。私たちは苦労したが、しかしこのような不幸を造ったのはそもそも誰なのか。中国で受けた被害も大事だけど、中国に対して行ったことも忘れてはいけないのではないか」である⁸。

老人の発言はその場で議論されることはもちろんなかったが、しかし石碑から読み取れない記憶の多元性を垣間見ることができた。また中国について言及したことは、一国に拘束されない記憶の越境可能性を示唆する。実際、泰阜村はその歴史性から、中国で日本人公墓を唯一持つ方正県との交流活動を長年にわたって継続してきている。「戦争記憶」という負の遺産を「現在・将来志向」という正の遺産へと転換させた一事例である。そこから歴史認識の対立を越える可能性が看取できる。「記憶の場」という概念で長野県の満洲記憶を捉えたとき、こうした事例はほかにも見られる⁹。今後はそれらの歴史認識の対立を越えて実践されている交流の事例を収集しつつ、本研究課題をさらに深めていく予定である。

【参考文献】

- 樋口耕一，2004，「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合」（数理社会学会『理論と方法』19(1)）
- 孝本貢，2009，「戦後地域社会における戦争死者慰霊祭祀—慰霊碑等の建立・祭祀についての事例研究」（『明治大学人文科学研究科紀要』第 64 号）
- 川端亮・樋口耕一，2003，「インターネットに対する人々の意識—自由回答の分析から」（『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第 29 巻）
- 小関隆，1998，「コメモレイションの文化史のために」（阿部安成・小関隆・見市雅俊）

⁸ こうした発言は 2007 年に発刊された『満洲泰阜分村』にも見られた。

“強調したのは私たちもだがその裏側で、開拓民に倍する中国農民の被った苦痛、すなわち家を焼かれ、土地を失い、ふる里を追われた人たちのことである。このことを忘れて、私たちに成仏はない（『満洲泰阜分村—七〇年の歴史と記憶』編集委員会 2007: 56）。

⁹ 最近の事例として、2013 年 4 月に開館された『満蒙開拓平和記念館』がとりわけ挙げられる。

- ど編『記憶のかたち』柏書房)
- 「満洲泰阜分村一七〇年の歴史と記憶」編集委員会，2007，『満洲泰阜分村一七〇年の歴史と記憶』不二出版。
- 南誠，2009，『満洲移民』経験再考」（日本大学国際シンポジウム報告書『The Japanese Odyssey』）
- 小川伸彦，2002，「モノと記憶の保存」（荻野昌弘編『文化遺産の社会学』新曜社）
- ピエル・ノラ（谷川稔監訳），2002，『記憶の場』岩波書店。
- 長野県開拓自興会満洲開拓史刊行会編，1984，『長野県満洲開拓史・総編』東京法令出版。
- 坂部晶子，2008，『「満洲」経験の社会学』世界思想社。
- 孫歌，2002，『アジアを語ることのジレンマ』岩波書店。
- 山本有造編，2007，『「満洲」記憶と歴史』京都大学学術出版会。